働く現役世代の地域活動のハードルを下げるためには
―プロボノワーカーへのインタビューからヒントを探る―

久保田　藤郎

1　序論

1-1　研究動機

著者は、これまで自治体職員として広報課で勤務し、市政情報やまちの魅力を発信してきた。広報活動では、住民による地域活動を取り上げることを重視している。住民の地域活動への参加は、コミュニティや防災などさまざまな場面で、まちの持続性を高める効果が期待できるからだ。

地域活動は、活動者自身にも利益をもたらしている。取材活動の中でさまざまな活動者の話を聞いてきたが、共通するのは、家庭や職場以外の顔を持ち人生を活き活きと楽しんでいる、ということだ。しかし、一方で、地域活動に対し何らかのハードルを感じ参加の機会を逃してしまう人は多いのではないだろうか。これは、まちの持続性の観点からすると、地域にとって大きな損失である。

これまでさまざまな地域活動の形を見る中で、著者自身も人生やキャリアの幅を広げたいという思いがあり、家庭と職場以外の繋がりを地域に持つことへ興味・関心を抱いている。しかし、仕事や家庭、育児等で日々時間に追われるなどの理由から、その一歩を踏み出せずにいる。

そこで本研究では、地域活動への参加のハードルを下げる手立てを模索したい。とりわけ、この内容は著者自身の課題でもあるため、著者と同様、地域活動に全く参加したことがない現役世代へ焦点を当てる。

また本研究では、仕事で得た知識や経験、専門性を活かしたボランティア活動であるプロボノに着目し、地域活動への参加ハードルを下げるヒントを探る。著者は、地域や社会的な活動に繋がる方法を模索してきたが、時間的な制約のほかに、新しいコミュニティに身を投じ、一から人間関係を築いていくことに煩わしさを感じ一歩を踏み出せずにいた。そのような中でインターネットの検索からプロボノを知ったわけだが、その時「これなら自分もできるかもしれない」と直感した。そして、プロボノのことを調べていくうちに、地域活動への参加ハードルを下げる可能性を感じるとともに、著者の「これなら自分もできるかもしれない」という直感を掘り下げたいという思いから、本研究に至った。

1-1-1　地域活動の定義

本研究でいう地域活動とは、自治会やPTAといった地縁により組織されたものから、NPO や勉強会など地域の課題を解決するために組織されたものまで含み、「家庭や仕事意外の顔を持っている」といったように広く定義するものとする。ただし、少しでも考察範囲をシャープにするため、趣味のサークル活動や講座のような学習活動等の、娯楽消費や自身の能力向上に帰属するものは、本研究の考察対象から除外する。これらの活動は、間接的にはコミュニティ形成としての機能があるが、社会的課題に対して直接働きかけるものでないためである。

1-2　先行研究の整理

1-2-1　ボランティアなどの地域活動への参加に関する先行研究

働く現役世代にとって、地域活動のハードルとなっている主な要素は、「活動内容を知らない・関心がない」「忙しい」「煩わしい（面倒）」が上位に挙げられる（公益財団法人東京市町村自治調査会2016）。

この他に、内閣府調査（2020）によると、ボランティア活動への参加動機として、「社会の役に立ちたいと思ったから」「自己啓発や自らの成長につながると考えたため」「自分や家族が関係している活動への支援」の順となっている。その一方で、ボランティア活動への参加の妨げとして、「参加する時間がない」、「活動に関する情報が十分にない」

「参加するための休暇が取りづらい」といった要素が上位に挙げられた（内閣府調査 2020）。

また、NPO法人サービスグラントの調査によると、ボランティア参加への関心は全体の 30%が持っているが、過去1年間での参加経験者は26%に留まっている。そして、活動への参加をためらう要素として、「どのようなボランティア活動の場があるか分からない」「自分にどのような活動ができるか分からない」「いったん始めるといい加減なことはできない」が上位となった（NPO 法人サービスグラント 2018）。

これらをまとめると、ボランティアなどの地域活動への参加のハードルとなる要因は大きく次の3つ分類することができる。第一に、「忙しい」に見られるような時間要因である。第二に、活動するイメージを持つことができない問題としての情報要因（関心がないを含む）である。そして第三に、「煩わしさ」であったり、「いったん始めるといい加減なことはできない」に見られるような心理的要因である。著者が直面した、新しいコミュニティに身を投じ、一から人間関係を築いていくことへの煩わしさも、この要因に分類される。

ただし、このうち情報要因については、本研究の関心が、地域活動に興味はあるが参加を躊躇することへの処方箋を模索するものであることから、考察の対象から除外する。

1-2-2　プロボノに関する先行研究

はじめに、日本におけるプロボノの成り立ちについて整理する。

プロボノとは、仕事で得た知識や経験、専門性を活かしたボランティア活動のことである。具体的には、社会的活動を行うソーシャルセクター（地域団体や自治体、NPO 法人など）の活動における課題に対して、それぞれ異なる専門性を持つ社会人が複数人でチームを組み、有期のプロジェクト期間の中で、課題解決のための提案等を成果物として提出するというものである。

もともとは欧米で生まれた概念であり、医師や弁護士などの職業が専門職能を活かす社会貢献活動を指していたが、米国における 2001 年のタップルートファウンデーション[1)]の設立を契機にITやマーケティング、デザインなど幅広いビジネスパーソンに対象が拡張された。

日本では、1998 年の特定非営利活動促進法の成立以降、NPO 団体が法人としての立ち位置を確保できるようになったこと、社会貢献や社会課題の解決に取り組みながらビジネスを成立させる社会起業家という概念が 2000 年代後半に入るとビジネスパーソンの関心を呼ぶようになったことを背景に、プロボノへの関心が高まり始めた。

具体的には、プロボノの仕組みに着目した嵯峨生馬氏が2005年に認定NPO法人サービスグラント（以下、サービスグラント）を立ち上げ、支援先の NPO 法人とプロボノワーカーを仲介・調整するコーディネートや、企業の社員研修やCSR活動における活用をサポートするなどの活動を通じて、プロボノを浸透させてきた。そして、上述の背景から、「会社を辞めないという慎重さとなおかつ、社会全体にも自身にも意義を感じられる活動を求める志向とを両立させる方程式の解」として、「無理のない現実的な行動スタイルの選択肢のひとつ」としてプロボノが注目され始めた（嵯峨生馬　2011）。このことは、サービスグラントがプロボノプロジェクトの参加者に実施したアンケート調査（2011）において、「スキルや経験の活用」「ボランティア・社会貢献への興味関心」といった要素がプロボノへの参加動機として主となっていることのも現れている（嵯峨生馬 2011）。

続いて、プロボノに関連する先行研究を整理する。

まず、プロボノへの参加動機や経験したことによる参加者自身の変化に焦点を当てた調査を軸にした研究として、東根ちよ（2019）や高瀬桃子（2020）がある。

東根は、プロボノが地域におけるボランタリーセクターの量と質を高める可能性を言及した。量の観点については、「スキルを活かせる」というプロボノのメリットが、これまでボランタリーセクターへの関わりが希薄であった年代（20～50 代）の有職者の参加を実現するものと考察している。質の観点については、ボランタリーセクターに対する理解やそこで取り扱われている社会問題に対する学びが生じることが、広く間接的にボランタリーセクターの質の向上に寄与すると論じている（東根ちよ

2019）。

他方、高瀬は、個人の内面に考察のフィールドを置いている。プロボノ参加者へのインタビュー調査の結果、プロボノの個人的意義が、他者や未知とのつながりや関わりを得て越境的学習をすることにあることを示唆した。さらに、プロボノ経験者が余暇の時間を用いて本業における課題意識を解消する傾向が見られたことに着目し、個人がワークとライフの境界線を曖昧にするようになっており、その一端がプロボノへの参加という事象に表れているとした（高瀬桃子 2020）。

次に、企業におけるプロボノの実践をテーマとした研究として、（藤澤理恵・香川秀太 2015）は、組織にとってプロボノ活動への参加機会をつくることが従業員の変革的役割志向を引き出す組織社会化戦術として活用できる可能性を示唆している。加えて、杉岡（2020）は、企業とは異なる組織である自治体の人材育成においてもプロボノが有効に働く可能性を示している（杉岡秀紀 2020）。

また、マクロな視点からの考察として、石山（2015）は、変化の早い不確実な社会におけるパラレルキャリアの重要性を説いているが、本業以外の社会活動を実践するパラレルキャリアの場で、普段出会えない様々な人々とチームを組み課題を解決する経験を積むことで、リーダーシップや多様な価値観に対する包容力が身につくとし、その実践の事例のひとつとして、プロボノでの活動を紹介している。また、プロボノのほかに、社会的課題を解決するためのNPO等での活動が複数取り上げられているが、それぞれの活動の特徴や価値の序列を示すものではなく、様々な選択肢を示した上で、まずは行動してみることの大切さを訴えており、読者の社会的活動への参加を後押しする内容も含んでいる。その中では、「新しい人と話をするのは苦手であるし、緊張する。しかし、だからこそ、パラレルキャリアが役に立つと思うことがある。話題になんの共通性もなく、新しい人と打ち解けることには大きな労力がいる。しかし、似た方向性の志、想いがある社会活動の中では、その話題を交わすことで、打ち解けることが通常よりもラクだと感じることが多いのだ。」（P190）と、新たなコミュニティに参加する際の心理的ハードルにも言及している（ダイヤモンド社）。

上記以外にも、プロボノに関する先行研究としては、法曹界や福祉関連など特定業種におけるプロボノ活用の意義に触れた先行研究が数多あるが、本研究の関心とは距離があるため、整理の対象からは除外する。

1-3　リサーチクエスチョン

上記先行研究から、プロボノは、有期のプロジェクトであるため時間の都合がつけやすく、また、仕事で得たスキルを活かして社会的活動に参加することができることから、通常のボランティア活動や地域活動よりも、働く現役世代にとって参加しやすいものであることが分かる。

しかし、著者は、現役世代がプロボノを選択する際に、次のような心理的要素がその選択を後押ししているのではないかと考える。それは、「自身の役割が明確である」ことだ。プロボノでは、仕事で得た知識や経験、専門性を活かすことが期待されているため、自身が求められる役割が明確である。そのことは新たなコミュニティに身を投じ、一から人間関係を築く煩わしさを低減できるのではないかと期待する。この点については、前述の石山（2015）の考察に通ずるものがある。そして、これが1-1研究動機で述べた「これなら自分もできるかもしれない」を構成するものの一つであると考えている。そこで本研究では、これまでの先行研究において、地域活動参加におけるハードルとしても、プロボノの効用としても掘り下げて論じられることがなかった煩わしさ（心理的ハードル）に着目したリサーチクエスチョンを設定する。

RQ：地域活動未経験者の参加における煩わしさ（心理的ハードル）を低減することに対して、プロボノからどのようなエッセンスを抽出することができるか。

1-4　研究計画・手法

本研究では、プロボノの活動経験者へのインタビュー調査を行い、上記RQのヒントを探る。

インタビュイーの選定については、著者が「第19回　みたか市民活動・NPOフォーラム」のクロージングセッション「プロボノ～あなたの経験とスキ

ルが地域を変える～」（2020年10月11日）を聴講したことが縁となっている。そこで登壇したプロボノワーカー（以下Aとする。）にインタビューを依頼したことをきっかけに、Aが参加する東京ホームタウン大学院[2)]のプロジェクトチームに招き入れていただいた。そのチームメンバーの中から、複数件のプロボノプロジェクト経験者にインタビューを依頼した。

なお、インタビューは著者とインタビュイーの1対1で、所要時間は1時間程度。新型コロナウイルス感染症対策として直接の面談はせず、Zoomまたは Skypeを用いて行い、インタビュイーの了承を経て録画をした。インタビューの流れとしては、半構造化インタビューの形式で行い、プロボノに至るまでの流れやその時々の動機等を時系列に沿い聞いた。

1-5　サービスグラントのプロボノについて

本研究のインタビュイーは主にサービスグラントのプロボノを経験しているため、インタビューの内容をイメージしやすくするために、本題に先立ちサービスグラントのプロボノの特徴について記す。

サービスグラントでは、社会的活動を行うソーシャルセクターの課題に対し、職業上の知識や経験を持つ多彩な人々によるプロボノでの支援をコーディネートしている。

参加希望者は、説明会に参加の上、自身のスキル（業務内容や役割、実績等）を登録する。その際に、プロジェクトにおいて希望するポジションを登録する。選択肢として用意されているポジションは、プロジェクトマネージャー、マーケッターといったものから、ウェブデザイナーやコピーライター、写真・映像・音楽等の制作といったクリエイティブなものまで多岐にわたる。

登録後、プロジェクトが立ち上がる際に参加立候補に関する案内メールが届く。参加希望者は立候補する形となり、立候補者の中から、登録内容、参加動機などを見た上で、バランスを重視し事務局によりチーム編成が行われる。この編成を経て、事務局からアサインがあった人がプロジェクトに参加することとなる。

また、活動時間の目安は、平均週5時間で1～6か月の期間とされており、本業との両立が可能な範囲でプロジェクトを進める。

2　インタビュー調査

2-1　本章の役割とスコープの絞り直し

この章では、インタビュイーがプロボノに至る経緯や、そこで得られたものなどについて、時系列に沿って内容を整理し、次の2つの論点からプロボノの効用について考察する。

（論点1）インタビュイーの語りから抽出したプロボノの効用―キャリアの視点から―
（論点2）著者仮説であるプロボノにおける「役割が明確である」ことの効用

上記の論点整理に至った理由であるが、実のところ、今回のインタビューでは、新たなコミュニティに参加する際の煩わしさに苦慮したエピソードが出てこなかったのだ。インタビュイーの語りから共通して確認されたのは、キャリアの視点から示すことができるプロボノのメリットであった。そのため、著者の仮説については、インタビュー終盤に著者から説明し、それに対する考えを聞く形となった。

そこで、本研究をより多くの現役世代に還元できる内容とするため、スコープの絞り直しを図った。当初は「地域活動に興味はあるが、参加できずにいる人」という表現で対象を絞っていたが、「キャリアに対する悩みや課題を抱えている人」という視点も加えて、地域活動に全く参加したことがない現役世代の参加について考察することとした。

2-2　（論点1）インタビュイーの語りから抽出したプロボノの効用―キャリアの視点から―

2-2-1　Aの場合―本業におけるスキル、視野の向上―

Aは、40代男性。IT企業での勤務でスキルを磨き、プロボノでの社会的活動などを経て独立。AがIT企業でスキルを積み重ねてきた理由やプロボノへ意識が向いた流れは次の語りのとおりである。

> IT系に入社した際の志みたいなものは、特にないんです。大学を卒業して、特にやりたい

ことがなかったので、潰しがききそうな IT 業界に飛び込みました。

でも、キャリアパスは描いてました。で、30代半ばになる頃にだいたいイメージしていたキャリアはつくれた。それから、どういう方向性に行くか悩んだ時期があったんです。そういった時期に、社会的価値を仕事のなかで出すかということを強く意識するようになって、会社のCSRやボランティア活動などを経て、36歳か7歳くらいのときにプロボノに出会って、それでやってみたって感じですね。

A は、会社員として働く中で会社の CSR 活動等に触れ、プロボノに至った。A が働く根底には、「社会的価値を仕事のなかで出す」という意識が強くあるようだが、どのような原体験やモチベーションがあったのだろうか。それについては次の語りから見えてくる。

BtoC のビジネスを長くやっていました。コンシューマー向けのウェブサイト制作。中小企業がネットを活用して、遠隔地の物産を売れるようになった、みたいな地方創生的な側面を見てきたんです。そういった原体験があり、社会をよく回すようなビジネスをやりたいということはずっと考えていました。

そのためにスキルを磨かなければということで、転職してきて、今度は BtoB のビジネスに携わりました。そうすると今度はコンシューマーから遠くて、自分の仕事が社会的にどれくらいのインパクトを与えているのかが分かりづらかったんですね。自分の仕事が社会に与える影響力を知りたいと模索している中で、CSR 活動への参加に至りました。そして、プロボノへの参加にも、その動機がリンクしていると思います。

A の「社会的価値を仕事のなかで出す」という意識には、「社会をよく回すようなビジネスをやりたい」と「自分の仕事が社会的にどれくらいインパクトを与えているのか」というモチベーションが関わっていることが分かる。

それでは、A はどのような流れでプロボノに参加したのだろうか。

2015 年、今から 5.6 年くらい前ですね。メディアの中でプロボノという言葉が出てきたり、知り合いからもプロボノをやっているということも聞くようになり、調べてみたりしました。あとは、同業種以外の人と接点を持ってみたいなと思ったり、自分の力試しになるとも思いました。それで、サービスグラントのプロボノが、検索で一番上にでてきて、プロジェクト募集中だったので申し込んでみたっていう流れです。

（著者質問）参加するのに躊躇したことはなかったですか？

僕はないんですけど、躊躇したって人は周りでもよく聞きますね。入ってからも自分は何ができるんだろうって模索している人もいるので。んー半々かな。

A にとって、プロボノ参加への心理的な障壁はなかったようだ。これは、A には「社会をよく回すようなビジネスをやりたい」という確固たるモチベーションがあり、その目的を達成するための通過点または手段としてプロボノを捉えているためであると推察する。このことは、次の語りからも伺うことができる。

プロボノ自体がリサーチというか、社会にどういう人たちがいて、この人たちにどういうサービスを提供したらプラットフォームが成り立つのかな、みたいなことを考えながらプロボノをしていたんですけど。プロボノのプロジェクトを経て、高齢者、子育て、路上生活者の就労支援など、様々な社会課題に触れることができたと思います。様々なイシューに気が付くと、ニュースの見方も変わりましたね。やっぱり自分事として考えるようになります。（中略）

僕がよく思うんですけど、ガチのマーケッターみたいな人がたまにチームにいて、そういう人に仕事の仕方ってやっぱり参考になるんですよね。そういうのが刺激になるし、そういう

ことを楽しんでるひともいるんじゃないかなって気はしています。

「ビジネスのためのリサーチができる」や「視野を広げることができる」ということが、A がプロボノに参加するメリットであることが分かる。

これらのメリットは、A のように、本業の延長線上において、明確なビジョンや志を持つ人のみが享受できるメリットなのだろうか。次の事例では、このメリットについて別の角度から考察を試みる。

2-2-2 Bの場合―本業（経済的ベース）を維持しながらキャリアの可能性（志）を追及―

B は、40 代女性で、広告代理店に勤務する傍ら、高齢者支援分野を中心に様々なプロジェクトに参加し、精力的に活動している。B は、プロボノの参加動機として最も多く挙げられるスキル向上などの目的を、特別に意識せず参加している事例である。

プロボノは意識していなくて、ほんと、ボランティアもプロボノもあんまり変わらないんじゃないのというのが私の本心で、そういうことを、本業とは別にプライベートとしてやりたいなって思ったのがきっかけです。

その理由は次の語りにあるとおり、B の強い志にある。

本業は広告会社で広告代理店で働いているんですけど、全然、高齢者支援とか医療とか福祉とか、全く関係ない仕事なんですけど、あの一なんだろう、こう、自分の原体験から話すと、自分のおじいちゃんが空襲で亡くなって、おばあちゃんが女手一つで父親を育ててきて、こんなに日本が豊かになったのもお年寄りのお陰だっていう感謝の気持ちが小さい頃からあって、だけど、今お年寄りがないがしろにされちゃったりだとか、っていう世の中が残念だなと思うので。（中略）

たまたまお友達が介護事業所を経営していたので、あ、若い人でもこういう仕事をする人がいるんだってすごく衝撃的で、今から 10 年くらい前、30 代くらいのときに思って、私もヘルパーの資格をとったんですね。で、えーと、せっかく資格を取ったんだったら、土曜日だけヘルパーの仕事をしてみようと思って、地元の杉並で日医ケアセンターというところでアルバイトをして、一日 4 件くらいのお宅を自転車で回って、おばあちゃんのおむつ替えをしたりだとか、お部屋のお掃除をしたりだとかをしていたら、やっぱり高齢者の課題っていっぱいあるなと思って、これをビジネスで解決するようなことがしたいなって思って、ビジネススクールみたいな所にも通ったりしたんですけど、やっぱり現場を草の根的に活動していくことも必要だなと思って。

B には、高齢者への感謝や尊敬の念があり、ゆくゆくは高齢者支援分野での起業という志がある。そして、プロボノや地域活動は、現場を知るためのリサーチのひとつである。この点はＡと同様である。

それでは、どのようにしてＢはプロボノに至ったのか。Ｂにとっての初めてのプロボノは、地域の高齢者の食を支えるワーキンググループの集合体である「新宿食支援研究会」での活動である。

高齢者の課題のひとつに食事をどう摂っていくかっていうのがあったので、それで新宿食支援研究会を知って、食支援研究会はほんと、専門職の人ばかり、栄養士さんとか、歯科衛生士さんとか、ケアマネージャーさんとかそういう人ばっかりなんですけど、一般の人も受け入れてくれてるので、そこで入って活動させてもらったっていう感じですね。献立を考えるチームがいたり、食べる姿勢について考えるチームがいたり、ワーキンググループが 20 個ぐらいあって、そのうち 2 つに参加しています。プロボノって形を団体では言ってはいないんですけど、形としてはプロボノですね。お給料が発生しているわけではないですし、みんなボランティアでやっています。

（著者質問）参加する前に躊躇するようなことはありましたか？

それが私はなかったんです。“自信がないと

行けないよね”という話は聞くことはあるけれど、そういうのは男性の方が躊躇するみたいですね。自分の持っているスキルで活かせるものがあるだろうか、ということを考えるみたいですけれど。自分は別に就職試験じゃないから、ちょっといってみようというタイプ。高齢者支援というのをやりたい、という志が強すぎて、それに関連することはいろいろとやっていきたいと考えています。

この語りからも、B がプロボノを目的として活動していないことが分かる。B は、自身の志を追い求める過程で偶然プロボノにたどり着いたというわけだ。

それでは、これほどに高齢者支援を志すBは、なぜ本業として広告代理店での勤務を続けているのだろうか。

ちょっと考えたですけど、やっぱり介護の現場だと、毎日毎日オムツ替えとかそういう現場からだなと思って、40 代ともなると体力もきついし、給料の面でも、なかなかそういうエッセンシャルワーカーって本当に厳しくって、年収 300 万円からスタートといった話も聞く。そのようなことを考えると、今の方がまだいいかな、と現実的な選択をしているという感じです。もちろんそういった仕事をしている人たちは尊敬してますが、私の年齢で経験的にも収入的にも、一からスタートというのはちょっと難しいかなって思います。

B が広告代理店での勤務を続ける理由として、経験、収入といった要素が挙げられた。これらは、本業とは異なる分野における志の達成を目指す人にとってクリティカルなものではないだろうか。経験を積む必要があるが、そのためには本業外で時間を確保する必要がある。時間を捻出するためには、本業の制約がある。しかし、本業を手放すと経済的な問題が出てくる。本業と志の分野が異なるほど、その二者が時間的にも経済的にも並存できる余地が少なくなる。

このようなある種のトレードオフ構造がある中、B の語りからは「現実的な選択」がキーワードとして出てきた。「本業という経済的ベースを捨てずに、キャリアの可能性を求めることができる」というメリットがプロボノにはあるということが分かる。つまり、前述 A の語りで出た「ビジネスのためのリサーチができる」「視野を広げることができる」といったプロボノのメリットは、本業と志の分野の距離に関わらず享受できるものであると言える。

次の事例では、このメリットが、志の強弱に影響されるものであるかを考察する。

2-2-3 C の場合―種をまくような感覚でキャリアを追求―

C は 30 代男性で、化学系メーカーでの勤務を経て、プロボノを経験し、ソーシャルセクターへ転職した。C は、A や B のようなモチベーションや志をもとに進むというよりは、自分の置かれている現状等を理詰めで分析し、選択肢を絞っていくタイプである。このことは、次の語りから伺える。

（大学を卒業するにあたっての就職活動では）結構絞って、メーカーばかり受けていました。その前に、交換留学をやっていたり、海外に関心があり、グローバルな事業環境があるといいなと、いうのをひとつの軸にして就職活動をした記憶があります。もうひとつは、現場みたいなものがあると個人的にはしっくりくるなと思ったので、なんか商社とか銀行よりは、何か前線で工場構えてやってますと、いう方が性に合っているだろうなと、その方が何が起こっているか分かりやすいだろうなと。グローバルで現場がある、というとメーカーからっていう。BtoC よりは BtoB の方が向いているかなということも考えたり。なので、何がしたいか、というより理詰めでこう詰めていって、はい。

それではCは、どのように転職を意識していったのだろうか。

転職した理由は、結構いっぱいあって、これっていうのも難しいんですけど、えっとですね、ひとつは今いる組織（ソーシャルセク

ター）って、私が学生時代に関わっていたこともあって、何をやっているのかイメージしやすいというのもあって、多文化交流といいますか、定住外国人の支援を課題としてやって、そこの日本語教室の運営のアルバイトをやってたんですね。そのあたりに関心が強くあったので、それに関わってみたいと思っていたのがひとつ。募集があったので思い切って受けたというのがあります。

もうひとつ、正直ベースで言うと経理の仕事っていうのだけ、このままやっていくのはどうだろう、不安なのか危機感なのか、難しいですけれども、不安もあるし、このまま経理だけっていうのも、その経理って真に受けているわけではないですけど、よく言うのは AI が登場すると仕事がなくなるとか、まあ、やっている本人からするとなくならないのではないかと思いますが、漠然とした、はい、というのもありますし。

（中略）

あとは危機感、危機感あったのかな……シングルキャリアに対する危機感。自分って結局 1 社にいて、何もできてないなっていう。実行できてないなっていうのはあったんですね。そこは一歩踏み出してみたいな、身軽になってみたいなというのはありました。一旦 30 くらいになってゼロになってみて、いろいろ可能性があるんだったらそういう時間をつくってみてもいいかなという。そんな感じですかね。このままのキャリアに閉塞感を感じたっていうのがあります。

C が転職を意識し始めた理由は、「もともと興味のある分野での就業」「キャリアに対する不安」など複数に渡る。そのような中で、転職にあたりプロボノから受けた影響は大きいと C は語る。

サービスグラントのプロボノは自分の中で大きくてですね、あのー、いろんなことが得られたと思っているんですけど、ひとつは今の会社だけの視点、まあ働いているとそこの視点しかないので窮屈さを感じることはあるんですけど、それでいいのかなって思うことは多くて、やっぱプロボノに行くと外の人と議論するし、仕事のやり方も見られるし、終わった後の人間関係も作れていろいろな話も聞けて、今自分がどういう環境で働いているかというのを客観的に見れるようになったというのはひとつ大きかった。なので、経理の仕事って外の人はこういう風に見ているんだって。自分にはどこに価値があるのかあまりピンと来ていないところがあったんですけど、多少の専門性があってこういうところが自分にはできないと仰られる方がいて、でもその方々というのはもっと別のマーケティングだとか、プロジェクトマネージメントとか自分にはできないことをやっていて、あーこう、役割なのかなっていう風に、自分がやっていることを多角的に見れました。

（中略）

あとひとつは、私個人が、大学時代に政治学や公共哲学みたいなものを少しかじったことがあって、ベースにそういうところへの興味があるんですね。働いていく中で、行政の仕事とか、新卒のところにも頭の片隅にはあった。そうすると、転職を意識しはじめたときに、行政なのか NPO みたいな選択肢もあると。そこにはどういう人たちがいるのかなというのは気になっていた。プロボノをするとそういった人たちと関わることができた。

（中略）

1 回目のプロボノは、ミャンマーやネパール、当時洪水があった地域、そういうところへの支援を行う団体でした。2 回目はアットホームな居場所系、子ども食堂プラス地域の高齢者の活動拠点的なもの。その 2 つのプロボノをやったときに、2 回目の方が自分が思い描いていた非営利の活動、興味関心であったり、志に近いものがあった。キャリアの幅を広げたいと思って活動して、新しい世界を見た中で、自分にとってはここじゃないかな、というのが見えたし、何となく、何がしたいかがシャープに見えてきたというのがあります。

C はプロボノに参加したことで、会社の外の人間

関係ができたことにより、自分の状況やスキルを多角的に見ることができたという。そのことにより、C はより一層、転職を意識することになり、もともと興味がある分野（行政やNPOなどのソーシャルセクター）への転職を選択肢として考えるようになった。そして、プロボノに参加し、実際にソーシャルセクターを支援する中で、その思いはより強くなった。「新しい世界を見た中で、自分にとってはここじゃないかな、というのが見えたし、何となく、何がしたいかがシャープに見えてきた」という語りのとおり、C にとってプロボノは、ソーシャルセクターを見学する絶好の機会となったのだ。

このCの事例からは、「本業という経済的ベースを捨てずに、自身のキャリアの可能性を求めることができる」というプロボノのメリットは、志の有無・強弱に関わらず、広く参加者が享受できるものであることが分かった。

最後に、次の語りにより、このメリットについて志とは別の視点で考察する。

> 日本語ボランティアに登録したことがあるんですよ。そこに参加したんですけど、やっぱり、優しいおばあちゃんとかが 2、3 人で回していて…すごくいい活動だとは思うんですけど、キャリアのことで悩みながらボランティアをしていた自分にとっては、物足りないものがあって、これだったら自分が高齢とかになったときにやればいいと思ったんですよ。
>
> （中略）
>
> でも、なんだろうな、これまで参加した地域のボランティアとかでは、“久しぶりに若い人が来たぞ”という雰囲気になり、期待されちゃうというのを感じちゃって辞めずらかったです。やっぱプロボノのいいところは、半年とかの期限で区切られていて、また、チームメンバーもコミットする方も意欲のある方５名６名で構成されるので分散されている。そういったところに安心感がありました。ここなら自分のペースで参加できるし、あんまり拘束されることもないだろうな、という。
>
> （中略）
>
> キャリアの幅で迷っているのであれば、種をまくっていうか、少しずついろいろな活動をかじっていくのには、プロボノはありなんじゃないかなって思いますね。

C はプロボノに出会う前に、地域の外国人を対象とした語学ボランティアを経験したことがあるが、長く続かなかったという。その理由としては「キャリアの悩みを解決できるものでなかったこと」、「活躍を期待され、辞めづらさを感じたこと」が挙げられた。

一方、プロボノは、本業を維持したまま、異業種のメンバー5，6 人でチームを組み、各々が蓄積してきたスキルをもって、有期のプロジェクトとしてソーシャルセクターの経営課題等の解決に貢献するものである。その中で、ビジネスに資するスキルを活用・向上しながら、さまざまな分野のプロジェクトやメンバーとの関わりを通して視野を広げることができる。

つまり、通常の地域ボランティアとは異なり、プロボノは気負うことなく参加しやすいため、上記 C の語りにもあるとおり「種をまく」ような感覚で「本業という経済的ベースを捨てずに、自身のキャリアの可能性を求める」ことができるのだ。この点は、働く現役世代にとって大きなメリットとなる。

2-3 （論点2）著者仮説 プロボノにおける「役割が明確である」ことの効用

ここまでは、A、B、C それぞれのプロボノにおけるストーリーから、主にキャリアの視点からプロボノの効用について考察をしてきた。ここからは、著者の仮説に対するA、B、C各人の見解を聞き、著者の仮説を因数分解していく。著者から各人に対する仮説の示し方は以下のとおりである。

「“求められることが明確”であることは、新しい人間関係に入るときの心理的な負荷を下げてくれるのではないか。特にサービスグラントでは、提示されるジョブの中から自分が担えるものを登録し、プロジェクトへのアサインを待つ流れだ。この仕組みに、地域活動への参加ハードルを下げるためのヒントがあると考えている。」

2-3-1　能力発揮と安心感

（A の語り）いや、めっちゃ下がると思います。やることとできることが明確で、それが合致していることが、人が能力を発揮しやすい環境だと思うので。ジョブ型採用と一緒なんですけど、ジョブを定義して、そこに求められるスキルを提示して募集をかけるやり方だから、外しにくいんじゃないかなって気はしますね。」

（著者質問）A さんがプロボノのプロジェクトに参加するときに、この点を感じることはありました？

（A の語り）仕事上の肩書とプロジェクトに参加するにあたって用意されている役割が同じだったので、活動の中でやること、求められていることがイメージしやすかったです。サービスグラントは役割が明確になってることで、スキル転用がしやすいんだと思います。例えばマーケターとかだと、市場調査をしたりだとか、どちらかというとインタビュー調査がメインなんですけど、インタビューして支援先が考えていることやインサイトとかを引き出して、とかをやるんですけど、”あ、だったら自分でもできそう”と思うことってあるじゃないですか。例えばシステムの仕事で要件定義してたりだとか、市民の声を普段から調査してきいてたりだとか、自分のやっている仕事が、ここだったら転用できるってことをイメージさせやすいので、役割がきちんと定義されているんだと思いますね。

（C の語り）そうですねー、確かに。安心感だと思いますね。どこに自分が注力すればいいかっていうところが明確なので、あれもこれもになっちゃうと、現実的にも苦しいですし、なんだろなー、安心感はある。活動する中で、自分以外の人の役割も分かってきて、自分がやらなくてよい部分が分かってきて、その安心感というか、それが活動の定着にもつながったところもあります。私はマッチングする明確な職種がなかったので、ジョブが明確というのが大きな後押しになったわけではないですが、専門性がありマッチングする職種が明確な人にとっては、飛び込む段階の安心要因になると思います。

これらの語りから、「求められる役割が明確であること」が、新たなコミュニティに参加する際の心理的障壁を下げることに効果があることが示唆される。

また、A の語りからは、「求められる役割が明確であること」の効用を因数分解すると、そのひとつに「能力を発揮した自分をイメージしやすい」という要素が含まれることが分かる。

一方、C の語りからは「安心感」というワードがでてきた。C は A のように、ピンポイントでマッチするジョブ（求められるもの）があったわけではないが、自身の守備範囲が明確であることが「安心感」に繋がったという。

これらの「能力発揮」と「安心感」をいかにイメージできるかということが、新しいコミュニティに入る際のハードルを下げるための重要な要素となることが分かる。

2-3-2　ジェンダーによる差の可能性（雑感）

（B の語り）本業外の活動に参加するときに、「自信がないと行けない」という話は聞くことはあるけれど、そういうのは特に男性の方が躊躇するみたいですね。自分の持っているスキルで活かせるものがあるだろうか、ということを考えるみたいですけれど。男性は役割を求められることや、仕事にアサインしようとする意識が強いんじゃないか、という話はこれまで聞いたことがありますけどね。

（C の語り）男性は秩序的ですよね。混とんとしたものに対して、概念的に整理したがる。例えば、本当の大学じゃなくても、大学っていう名前がついているような学びのコミュニティってよくありますよね。個人的には、そういったところは男性がとっつきやすくなっているんじゃないかなっていう。なんかこう、枠があって、目的を持って入れるというか。目的意識と裏表なのかも。組織があって、目的があって、自分のスキル、役割、目的がマッチしたら、男性は力を発揮しやすいのかもしれないですね。

ただ、なかなか、地域って現場になればなるほどカオスなような気がしていて、そこに秩序だったものを提供できるかっていうのは、すごい、なんか難しいなーって思いますけど。

この語りからは、「求められる役割が明確であること」の効用について、ジェンダーにより差がある可能性が示唆される。この点については、もちろん一括りで論じることができないものであり、専門的な研究に基づいたものでもなく、あくまで著者の雑感である。しかし、よくあるエピソードとして、定年退職した男性が長年勤めてきた会社以外の繋がりを作ることに苦慮するといった話を聞くことはないだろうか。この類のエピソードが示唆するものは、「男性」と「役割」のある種の親和性ではないだろうか。

このポイントについては、次章の考察に直接繋がるものではない。地域活動等の新たなコミュニティへの参加の一歩を躊躇し、躊躇する自分に対して悩みを抱える方の一助となれば、という思いからあえて記述した。なぜなら、著者自身が、新たなコミュニティに飛び込むことを躊躇する自分に対し、劣等感を抱いていたが、インタビューを経てこれらの語りを聞く中で、“躊躇してしまう”要因は、ジェンダーによりビルトインされたある種の本能に基づくものも含まれる可能性に気がつき、必ずしも自分の性格や能力が劣っているわけではないと、考えを改めることができたからである。

3 インタビューを経た考察・提案

3-1 本研究の RQ に対する見解

まず、本研究の仮説から導き出した RQ「地域活動未経験者の参加における煩わしさ（心理的ハードル）を低減することに対して、プロボノからどのようなエッセンスを抽出することができるか」に対するひとつの答えは、前章の「2-3-1 能力発揮と安心感」に記したとおりである。プロボノの特徴のひとつである「求められる役割が明確であること」が、新たなコミュニティに一歩を踏み出す際の煩わしさを低減する効果があることを確認できた。

しかし、この心理的ハードルは阻害要因のひとつに過ぎない。また、前述のとおり本研究では、インタビュー調査を経て、キャリアの視点を取り入れる形でスコープを絞り直している。

これらを踏まえ、次項では働く現役世代の地域活動への参加の形について、ささやかながら著者からの提案を記す。

3-2 働く現役世代が地域活動へ参加するための提案

3-2-1 プロボノのメリット要素を整理

提案にあたり、これまで出てきたプロボノのメリット要素について、インセンティブとハードル低下の視点から整理する。

まずインセンティブの視点である。

プロボノは、貢献の対象がソーシャルセクターであるため、活動に参加することで NPO 法人等の組織の活動を体験することができる。このことは、地域活動に興味がある人に対してインセンティブとして働く。また、「視野や人脈の拡大、スキルの向上」という効用については、キャリアの質を底上げするものであるため、働く現役世代にとってインセンティブとして働く。

次にハードル低下の視点である。

プロボノの利点である「有期のプロジェクトであること」。これは、家庭や仕事で時間に追われる忙しさに起因するハードルを下げる効果がある。加えて、一度入ったら抜けづらいという煩わしさに起因するハードルにも効果がある。そして、本稿の仮説である「役割が明確であること」。この点については前述のとおりだが、新たなコミュニティに一歩を踏み出す際の煩わしさを軽減する効果がある。

3-2-2 ペルソナの設定

次に、これらの要素がどのように働くのか図を用いて整理していくわけだが、それにあたり 2 グループのペルソナを設定した。ここではその設定理由を述べる。

著者は本研究において、RQ に沿いプロボノから得られるエッセンスをどのように地域活動への参加に還元するかを考えてきた。しかし、インタビュー調査を経て、キャリアにまつわる課題とプロボノの相性の良さを実感し、プロボノが、より働く現役世

代にとって地域活動の参加への助走となり得るのではないか、と考えるようになった。

そのため、①「地域やソーシャルな活動に興味があるが、新たなコミュニティに入ることに煩わしさを感じる」グループと、②「キャリアに対する悩みや課題を抱えている」グループを、働く現役世代の地域活動への参加の形について提案するにあたってのペルソナとして設定した。

下図において、この2グループの働く現役世代全体における立ち位置を示す（図1）。

本研究において、地域活動に参加したことがない現役世代を構成する要素を全て把握できているわけではない。ここについては検証が必要である。その中で、①グループのみをペルソナとして設定すると、包含できる対象は限られてくる。しかし、②のグループを入れることで多くの対象を包含できるのではないかと推察する。社会に出て就業していれば、大なり小なりキャリアにまつわる課題を抱えるはずだからである。

3-2-3　働く現役世代が地域活動に着地する流れ

ペルソナを設定したところで、ここでプロボノのメリット要素が与える影響と、働く現役世代が地域活動に着地する流れについて、図2を用い提案する。

まず、プロボノのメリット要素が与える影響だが、「ソーシャルセクターでの活動を体験することができる」「スキル向上、人脈・視野の拡大」の要素がグループ①、②それぞれにインセンティブとして働き、「有期のプロジェクト」「役割が明確」の要素が共通するハードルを下げることに作用することが分かる。

次に、これらのメリットが働いた結果、プロボノへ参加した①、②グループにはどのような動きが見られるだろうか。期待される変化のひとつは、「ソーシャルな活動に対する関心の出現・向上」である。この点については、サービスグラントが実施したプロボノ経験者への調査においても、「参加後にどのような変化があったか」という質問に対し、約 30%が「ボランティア活動に関する興味関心が高まった」と回答している（NPO 法人サービスグラント 2017）。

そしてソーシャルな場での活動に慣れてきた次の段階として、いよいよ地域活動に着地する。地域活動といっても、自治会やPTAといった地縁により組織されたもの（地縁型コミュニティ）から、NPO や勉強会など地域の課題を解決するために組織されたもの（課題解決型コミュニティ）まで定義の幅が広い。また、それぞれ活動から派生した新たなコミュニティの発生も考えられる。この中で、地縁型コ

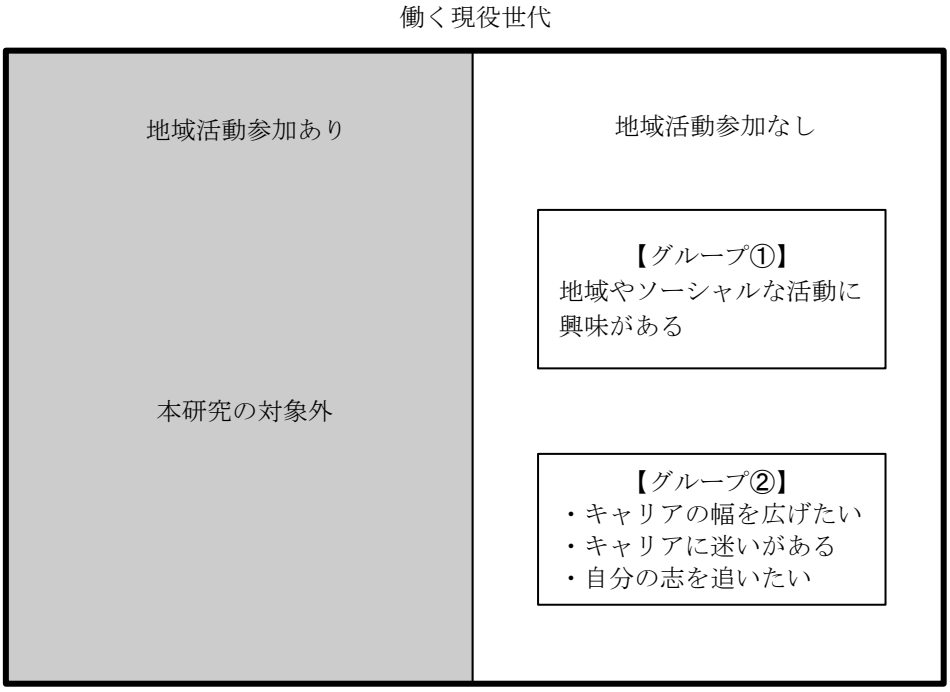

図1　本研究におけるペルソナグループ①②の立ち位置

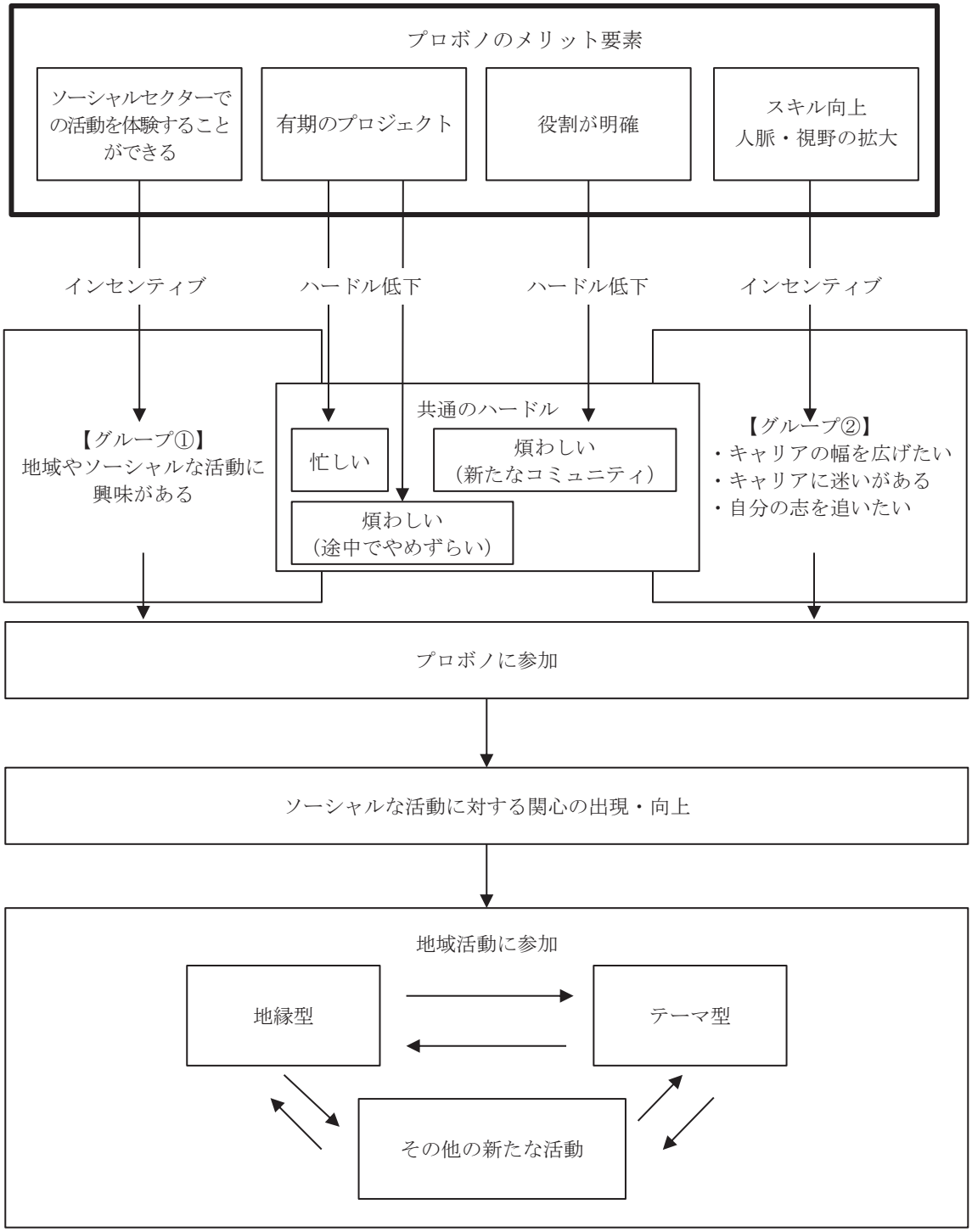

図2　プロボノのメリット要素が与える影響と現役世代が地域活動に着地する流れ

ミュニティについては、自助・共助による防災・防犯を担う役割をはじめ、住民の生命・財産といった地域のベースを守る機能があるため、特にその重要性を指摘される場面は多い。しかし、この点について著者は、「まずは何かしらの地域活動に行き着けばよい」と考える。

これらの活動は、地域という場において序列や順番はなく、等価に循環するものであり、例えはじめは地縁型以外のコミュニティから活動をスタートしたとしても、「家庭と仕事以外の顔」を持つことに

慣れ、長い人生の中でいつか地縁型のコミュニティに関わるという選択肢を“自然に”持つことができるようになればよい。

また、選択肢を持つという点で言うと、「ソーシャルな活動に対する関心の出現・向上」から「地域活動に参加」というプロセスについても、検証・議論の余地がある。プロボノを経験しソーシャルな活動に関心を持った人が、どのようなストーリーを経て地域活動に流入するのか、そして、どれくらいの割合で流入するのかなど、本研究で追い切れていない論点は多数ある。そしてもちろん、「参加しない」という選択もあり得るだろう。しかし、著者はそれでよいと考える。すぐに地域活動に関わることがなかったとしても、地域という場はそこにあり続ける。そして、長い人生の中で、ライフステージの変化等の要因から、地域への関わりが必要となる局面はいつ訪れるか分からない。この局面が訪れたとき、プロボノを経てソーシャルな活動を体感した人は、地域と繋がることを選択肢として“自然に”持つことができるのではないだろうか。

著者の提案をまとめると次のとおりである。

働く現役世代が、プロボノにより家庭と仕事以外のソーシャルな場で活動することを体験する。ソーシャルな場での活動に慣れてきたら、地域活動に参加し、地域へ根付いていくという流れである。この流れであれば、新たなコミュニティへの参加に煩わしさを感じる人も、キャリアにまつわる悩みを抱える人も含めた幅広い現役世代が、いつか何かしらの形で地域活動にタッチしやすくなるのではないかと考える。

3-2-4　参加者を募集する団体への提案（補足）

本研究では、地域活動の参加者に焦点を当ててきたため、参加者を募る団体側のインサイトまでは追い切れていない。そのため、参加者側からの視点のみとなるが、現役世代が地域活動へ参加するための提案の補足として、参加者を募る団体側が意識すべき点にも触れたいと思う。

これまで議論してきた現役世代のハードルを踏まえると次のような点がクリアされていると、参加者を集めやすくなると思われる。

まず、有期であること。現役世代のハードルとして多く挙げられる要素が「忙しい」である。また、一度参加すると抜けづらいという「煩わしさ」の要素もあることを確認してきた。これらのハードルを下げるために効果的であったプロボノの特徴が「有期であること」だ。有期であれば、気軽な参加を促すことができる。

そして、活動の内容がイメージしやすいこと。活動の内容がイメージしやすい広報物が用意されていれば、その活動に参加することにより参加者が得られるものが明確になり、参加するにあたってのインセンティブとなる。また、活動内容がイメージできると、参加者がその活動においてどのように能力を発揮することができるかがクリアになり、新たなコミュニティへ一歩を踏み出しやすくなる。

なお、上記を含む参加者ニーズは、NPO 法人サービスグラントが事務局となりプロボノコーディネートの手法をまとめた報告書の中でも触れられており、参加者を募る際の参考にしていただきたい。

4　おわりに

冒頭でも述べたとおり、住民の地域活動への参加は、コミュニティや防災などさまざまな場面でまちの持続性を高める効果が期待される。しかし、その一方で、地域活動に対し何らかのハードルを感じ参加の機会を逃してしまう人は多いのではないだろうかということを起点とし、本研究ではそのハードルを下げる手立てについて、プロボノに焦点を絞り探ってきた。その中で、「役割が明確である」ことや「本業という経済的ベースを捨てずに、自身のキャリアの可能性を求めることができる」ことといったプロボノのメリットについてインタビュー調査を経て確認してきた。そして、それらを踏まえ、働く現役世代が地域活動に着地する流れについて提案した。このような形で、家庭と仕事以外の顔を持ち、活き活きと人生を楽しめる人が増えることを願う。

本研究では、主にサービスグラントが展開するプロボノを考察対象としたが、日本国内にはサービスグラント以外にも「二枚目の名刺」や「activo」など、プロボノプロジェクトをマッチングする団体・サービスが存在する。これらの団体・サービスでは、募集形態がサービスグラントと異なる。そのため、

これらを利用したプロボノワーカーにインタビューをすることで、また違う角度からのヒントを得られる可能性がある。

また、プロボノワーカーへのインタビューから考察を広げてきたが、本研究の当初の問いである「新たなコミュニティに参加する際の煩わしさ」について、煩わしさを感じる人の声を拾うには至らなかった。この点についても、インタビュイーの対象を広げたり、数的調査の実施により考察を深められる可能性がある。

そして、これだけプロボノについて考察をしてきたが、本稿執筆のタイミングとの兼ね合いから、著者はまだプロボノに参加したことがない。著者自身がプロボノを実際に経験することで、より実感を込めた提案ができるはずである。この点については、本稿の筆を置いた後に実際に参加するつもりであり、上記の課題とともに回収し、より充実した研究へと発展させていきたい。

[注]

1) タップルートファウンデーション…あらゆる分野のプロフェッショナル達が、コミュニティの中で活動する数多くの非営利団体に対し円滑に支援できるよう仲介することを目的として、アーロン・ハースト氏により2001年にアメリカで設立された非営利組織。
2) 東京ホームタウン大学院…地域の活動の基盤強化を応援する取り組みとしてプロボノをコーディネートする「東京ホームタウンプロジェクト」（主催：東京都福祉保健局　事務局：サービスグラント）の中に設置されたプログラム。約半年の期間をかけ、自分自身が地域で行っていきたい活動を描き出し、プラン・ストーリーを立案・発表するもの。著者が参加したチームのテーマは「人はどういう経緯で地域デビューするのか？ 多様な世代の地域活動を後押しするモデル調査」である。

[文献]

石山恒貴（2015 年）「パラレルキャリアを始めよう！」ダイヤモンド社
NPO 法人サービスグラント（2018 年）「生活支援コーディネーターのための　明日からできる「プロボノ」活用ハンドブック」https://www.servicegrant.or.jp/news/1485/
NPO 法人サービスグラント HP 内　プロボノセンサス 2017（公開日 2017 年 5 月 12 日）https://www.servicegrant.or.jp/about/census/census2017/
嵯峨生馬（2011 年）「プロボノ～新しい社会貢献、新しい働き方～」勁草書房
杉岡秀紀（2020 年）「自治体における副業・プロボノ活用による人材育成―京都府福知山市を事例として―」
高瀬桃子（2020 年）「仕事や余暇の観点からみるプロボノの個人的意義―曖昧化するワークとライフの境界線―」
公益財団法人東京市町村自治調査会（2016 年）「住民がつくる自立した地域コミュニティの形成に関する調査研究報告書」
内閣府（2020 年）「令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査報告書」
東根ちよ（2019 年）「地域におけるプロジェクト型プロボノ活動の可能性―とっとりプロボノワーカーに対するインタビュー調査から―」
藤澤理恵・香川秀太（2015 年）「本業外の社会貢献活動（プロボノ）への参加が促進する組織再社会化」

プロフィール

久保田 藤郎

自治体職員として勤務する 30 代。業務を通じ、さまざまな地域活動に触れる中で、家庭と職場以外の繋がりを地域に持ち、人生やキャリアの幅を広げることへ興味・関心を抱く。
しかし、仕事や家庭、育児等で日々時間に追われるなどの理由により、その一歩を踏み出せずにいた。
何かしらの行動を起こしたいという気持ちと、地域活動への参加における働く世代に共通するハードルを下げる手立てを模索したいと考えから、三鷹まちづくり研究員の活動に参加し、筆を取るに至った。